自慢 其の1

海と暮らし -part1-

複雑で類い稀な地形をもつ七里ガ浜の海と砂浜

私が七里ガ浜の海と関わるようになったのは高校一年の頃。サーフィンというスポーツがあることを、湘南学園の同級生や先輩から聞き、以来、没頭するようになりました。ホームはもちろん七里の海。アマチュアからプロとなり、競技会では多少成績も残しました。今ではそれが職業になりましたが、七里のサーフショップ店主として、お客様や仲間と変わらず海を堪能しています。

さて、私がサーフィンを通して関わった、52年前の七里を思い出してみます。砂浜は道路際から海に向かって2m以上、砂丘状に隆起し、そこには野芝や浜昼顔などが生息。砂には貝粒が多く含まれ、風が強い日などは顔に当たると痛かったものです。七里の海は海底の約7割が岩盤ですが、所々に沖まで砂地の部分があり、波の大きな時はこれに沿って潮は沖へと流れます（泳いでいる時、この流れに乗ってしまうと大変危険）。ゴツゴツとした岩盤には、カジメ、タワラ、ワカメなどの海藻類が育ち、それを餌にするウニやサザエ、またそれを餌にするタコもいます。

砂地だけの海底に比べて海流が複雑で速いため、良質な水質が保たれ海藻類にとっても都合がいいのです。

近年、砂浜が侵食され被害も増しています。茅ケ崎では、ダム底清掃で出る砂を定期的に浜辺に補充していると聞きました。土地開発などで自然が破壊されつつありますが、七里ガ浜の綺麗な砂浜が少しでも残るよう考えていかなくてはと思います。

兵藤正和　七里ガ浜東4丁目
サーフショップ『オーシャングライド』オーナー

海と暮らし -part2-

海の繋がりを大切に
七里の海を次世代へ繋ぐ

七里ガ浜との出会いは36年前。初めてのサーフィンは新鮮で面白くすぐにのめり込んだ。

サーフボードにまたがって見る景色は絶景であった。江ノ島と小動岬の間に富士山を望み、丘に広がる七里ガ浜の住宅街の美しさは稲村ガ崎まで続いている。新田義貞もこれに似た光景を見て感動したに違いない。その頃から「いつかは海の見える家に住む」、こんな住宅メーカーの宣伝文句のような夢をもち、数年後の2001年、夢がかない海に面した七里ガ浜に住み始めた。

海は色々な恩恵を与えてくれる。しかし水辺の事故も後を立たず、日本の水難事故件数は世界的に見ても決して少なくはない。今、私はライフセービング活動をライフワークとしている。ライフセービングは人命救助を本旨とした社会活動であり、そのミッションの中でも海辺のごみ拾いは重要なフィールドワークだ。

2011年、東日本大震災の際には、サーフィンを通じて知り合った海の友人の誘いで救援物資を宮城県七ヶ浜に届け、以降数年間に渡り瓦礫を撤去、継続的に復興支援に関わった。

私にとって海は〝繋がり〟である。自治会の方々とも海をきっかけに繋がった。ここ七里ガ浜の美しい海を次世代に残すためにこの繋がりを大切にし、自治会一丸となって環境を守る活動を継続していこうと思う。

田村浩志　鎌倉山2丁目

自慢 其の2

プロムナードの桜

街の住民みんなが桜守（さくらもり）となって

毎年、プロムナードで美しい花を咲かせ私達を楽しませてくれる桜はソメイヨシノ。ロータリークラブさんによる植樹が行われてから既に46年が経っております。通常、ソメイヨシノの寿命は50から60年と言われますが、昨今では、病気に弱いソメイヨシノを伐採し、別の品種を植樹する事例が多く見られます。

一方、日本三大桜名所にも入る青森県弘前公園では、昭和35年より切らない管理を始めています。名産であるリンゴの栽培技術を参考にした〝弘前方式〟と呼ばれる方法で、２６００本もの桜を管理し、毎年素晴らしい花を咲かせています。中には明治時代の木もあり、古木の木肌に若々しいお花の咲く様はなんとも言えない美しさがあり感動いたします。

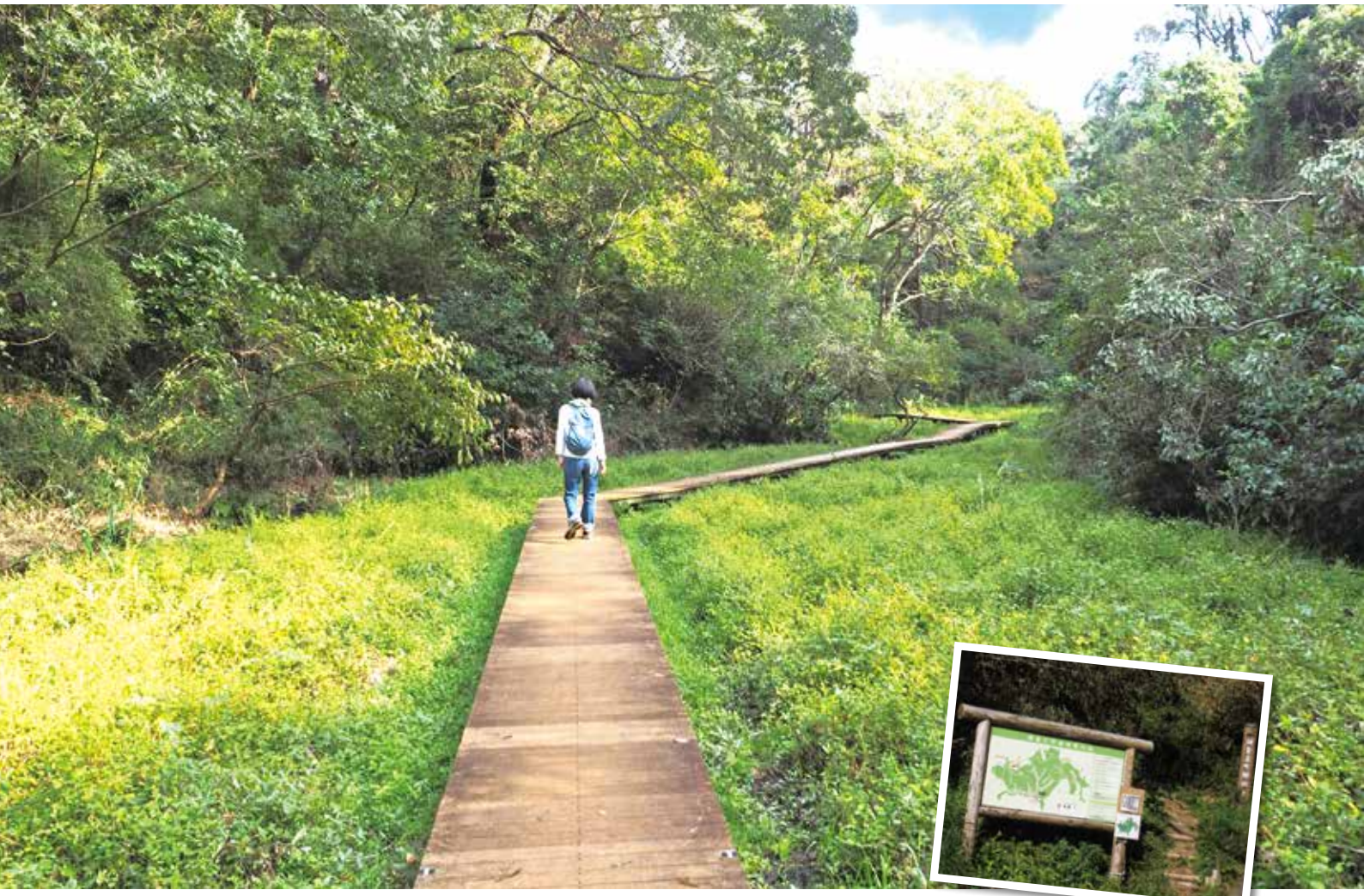
七里ガ浜商店会では、『桜プロジェクト委員会』を発足。２０１６年より一年を通じて度々弘前公園を訪れては、弘前市の樹医さんにご指導頂き、弘前方式にて桜の手入れを続けております。活動には、皆様からの募金を活用させていただいておりますが、今後は、住民の方々と一緒に施肥などをして、みんなの桜を共に守っていけたらと思っております。

お手入れが良くなると、通常は花芽ひと房に5個のお花が咲くところに、7個ものお花がつくこともあるそうです。いつの日か、「七里桜の７つ桜」を探せる事を願っております。

今井 康仁　七里ガ浜東4丁目
七里ガ浜商店会桜プロジェクト委員、ぶなヶ浜店主

自慢 其の4

広町の森



市民が守った緑地 広町の森を歩いてみよう

「ああ、ホタルが飛んだ！」。6月中旬。陽が落ち、その闇がさらに濃くなってゆく森の奥で子供達の声が聞こえます。声の方を見てみると源氏ボタルが「すぅ～」っと暗い夜空に舞い始めていました。それに続くように一匹、また一匹と夜空に光が舞い、やがて森の奥のあちらこちらで光の乱舞が始まり、森に来た人達は、自然の織り成す幻想的な光景に感嘆の声をあげました。源氏ボタルは6月、平家ボタルは7月に見られます。

広町の森は、七里ガ浜東、七里ガ浜一丁目、二丁目、鎌倉山、新鎌倉山、御所ケ丘の住宅地に囲まれた60ヘクタールの広大な緑地です。谷戸が入り組んだ地形と豊かな水のおかげで、樹齢200年超の山桜や大きな桐、クサモミジや欅、銀杏の紅葉など、四季折々の植物を見ることができます。またここには、多くの昆虫や蝶、ホタル、狸、大鷹、フクロウとさまざまな生物も生息しています。住宅地のすぐ隣にこのような豊かな里山があることは、暮らしを一段と豊かなものにしてくれています。広町の森は、まさに七里ガ浜の財産と言えるでしょう。

五十嵐 昭次
七里ガ浜東3丁目
自治会顧問、
七里ガ浜自治会前会長、
広町の森を楽しむ会、
鎌倉の自然を守る
連合会会員

25年に渡る市民運動

'80年代初めのバブル全盛期、広町開発は開発業者3社により計画され、周辺自治会住民による反対運動が展開されました。12万人の署名を背景に2002年10月、市は最終保全策を決定。事業者より113億円（市73億円、県20億円、国20億円）で森を買い上げ、2015年都市林公園として開園しました。＊参考:「広町の森はかくして守られた」（港の人社出版）、「広町緑地保全運動史」（鎌倉の自然を守る連合会）

自慢 其の6

街のおまわりさん

駐在勤務5年目。七里ガ浜の人と海に魅せられて

この街との出会いは、ふと本屋で手に取った「湘南スタイル」という雑誌です。当時、家族5人で横浜に住んでいたのですが、ひと目でその表紙に写っていた七里ガ浜の海と広町の緑に心を奪われました。

そして、ほどなく偶然にもこの七里ガ浜駐在所勤務の仕事が舞い込んできたのです。悩む間もなく即決！交通課勤務から、今一度、初心に返って「住民に寄り添う仕事を」と、駐在勤務の道を選んだのです。妻や子供たちも喜んでくれ、こうして晴れて第二の警察人生をスタートさせることになりました。当初は慣れない勤務に戸惑うことも多くありました。勤務時間外でも電話のベルは鳴るし、休日でも困った人がいれば駆け付けなくてはなりません。そんな中でもやってこられたのは、不安な気持ちを察して気遣ってくれる、自治会や商店街の方たちの助けがあったからこそです。

朝、小学校の前で見守っていると、子どもたちが元気に挨拶をしてくれます。通勤で七里ヶ浜駅に向かう人たちも顔見知りです。桜のプロムナードでは、犬の散歩やジョギングをする方、お年は召しているものの、気力も体力もある若々しい人で溢れています。今では七里ガ浜のどんな景色よりも、ここに住んでいる人に魅せられています。こんな素敵な街で仕事が出来るなんて、どんなに幸せなことでしょう。

これからもその感謝の気持ちを忘れずに、この街から事件事故を無くし、住民の誰もが被害に遭われることのないよう頑張りたいと思います。

加藤 忠治　七里ガ浜東1丁目
七里ガ浜駐在所勤務

自慢 其の8

アルミ缶処理作業

年間収益25万円！仲間づくりと地域貢献、一石二鳥の活動

七里ガ浜に越してきたのは8年前。知り合いもなく、これからは少し寂しい生活になるのかな…と思っていたところ、当時、自治会長だった五十嵐さんからこのボランティアのお誘いを受けました。幸い時間だけはたっぷりありましたから、喜んで引き受け、今ではライフワークの一つになっています。用事のある時は連絡を入れて自由に休めますし、何より一緒に作業をするメンバーが気持ちのいい方ばかり。そこから趣味の仲間へと広がり、愉快な七里ガ浜ライフのきっかけにもなったのでした。

この活動は、製缶会社やビール・飲料メーカー、商社などから成る「アルミ缶リサイクル協会」と連携するという独自ルートを通しています。そのため市の缶ごみ回収に比べて換金率が高く、その分収益も上がります。我が自治会の年間回収量はなんと3000kg、収益は25万円もあり、貴重な収入源となっています。また平成25年度には活動が認められ、団体として表彰も受けています。これも皆様がせっせと自治会裏まで空き缶を運んでくださっているおかげですね。

作業は缶の分類と小分け、圧縮機への投入、袋詰め、使用道具類の清掃など。当初は2時間かかっていましたが最近では効率も上がり1時間以下で完了。近隣からの騒音苦情も聞かれなくなりました。

活動は毎週火曜日の朝9時から、会館裏のスペースで行っています。随時メンバー募集中ですので、ぜひ一度覗いてみてください。

高橋 行人　七里ガ浜東3丁目
防犯理事、アルミ缶処理メンバー

自慢 其の9

かもめサポートとかもめサロン

『かもめサロン』の運営スタッフ竹内鞠子さんと常連の浅香佳枝さん。お客さんと言うよりお友達のよう。

『かもめサポート』のサポーターのお一人、桜井正利さん。

街の人の困ったを支え、知り合いを増やす2つの活動

『かもめサポート』は、街の人の「ちょっと困った！」を、時間のある自治会員がサポートする共助システムとして、2014年秋に始まりました。当時あった『かもめの会』（17年間続いた手作りお弁当宅配）の素晴らしい活動を知り、高齢者は食の他にも困っていることがあるのでは？と思ったことが発足のきっかけです。庭木の剪定や草むしり、大掃除のお手伝いなど、最近ではリピーターも増え、街の仕組みとして定着。担当するお宅に幾度か通ううちに親しくなり、しばらく連絡がないと「お体を悪くしてないだろうか？」と心配になる時があります。こんな風に街に知り合いが増え、互いを気遣える関係になれば、防犯・防災にもつながるのではないでしょうか。

また2017年には、空き家を活用した『かもめサロン』もスタートしました。陽射しのたっぷり差し込む居間に、四季折々の花の咲く庭、喫茶店とはまた違うリラックスした雰囲気は、すっかり高齢者の憩いの場として定着。次々と新たなお知り合いを呼び込んでは、お友達の輪を広げていらっしゃいます。また月に一度のワークショップでは、一芸に秀でた自治会員の方が講師になることも多く、この時ばかりは若い世代の方も参加して、世代を超えた街の交流場所になる兆しも見えています。

当初、この活動を通して思い描いたのは、「お互いを気遣える、そして安心して住める街作り」。これを目指して2つの活動をさらに発展させていきたいですね。

水野 勝太　七里ガ浜東5丁目
かもめサポート、かもめサロン運営委員

自慢 其の12

東二丁目公園

花好き住民の力で、全国1位に輝いた私たちの公園

1998年4月10日、二丁目公園は、雑草が目立つ児童公園から、花壇と芝生のある公園へと生まれ変わりました。これは、『市内123カ所の公園の代表として、当公園に予算を集中的に振分けたい』という自治会幹部や公園協会担当者の、熱心な請願が実を結んだものです。

大改造工事を経て公園は完成。これを受け、花好き住民ボランティアによる『公園愛護会』が組織され、以来、会員の自主的活動により維持管理をしてきました。役割分担はあえてせず、それぞれが清掃、散水、花柄摘み、植栽、芝刈り、肥料入れ、雑草取り等に汗を流します。花を絶やさないようにと、時には自宅の花木を株分けし、季節ごとに花を植え替え、その花でフラワーアレンジメント教室も行います。

こうした活動が実を結び、2000年には「全国花のまちづくりコンクール」団体部門の最優秀賞、「建設大臣賞」を受賞。団体部門全国532件中のトップに輝きました。また、2005年には奉仕人員が延べ1万人を達成し、2016年には延べ2万人という大変な数字になりました。

花は人を集めると言いますが、多くの方々が散歩コースに取り入れ、体の不自由な方がベンチに座り、藤棚の下で若い母親達が話し合い、その横で子供たちが芝生に転ぶ様子は本当に美しい光景です。ボランティア一人一人が励みと喜びを感ずる瞬間です。

和田 修一　七里ガ浜東2丁目
東二丁目公園愛護会会長

自慢 其の13

青パト隊

「青パト隊」隊長の中村誠さん（左）と照沼忠雄さん（右）。
左の写真は、「拍子木隊」の新保揚子さん（左）と大津喜久子さん（右）。

街の防犯はみんなの手で。青パトの魅力！

車に青色回転灯を点けて3日に一度、10年前から街を警備している青パト隊長の中村です。会社勤めを終え、「何か街の役に立つことを」と妻に勧められて手をあげました。毎晩晩酌の習慣のある私には、休肝日を設けるいい機会になるとも思ったのです。ところが半年、1年やってみると見当違い。泥棒さんの活動時間は夜間と思いきや、実は夕方が多いのです。暗くなっても洗濯物が外に出ていたり、家の電気がついていないお宅はご注意を。狙われていますよ。

さて、青パト隊を引き受けるにあたり、まずは警察指定の講習を受け、県警察本部長の認可も取りました。停止線では一旦止まり、左右が見渡せる地点まで徐行するなど、「青パトなのにあんな運転して！」と言われないよう、常に見られている意識を持って運転しています。

七里ガ浜自治会の自主防犯組織には〝青パト隊〟の他に、もう一つの部隊があります。それが、暑い日も寒い日も、「カチカチ」と音を響き渡らせて歩く〝拍子木隊〟です。また、街の皆さんが朝晩に行う犬の散歩も、言わば街の〝わんわんパトロール〟ですね。そして、住宅街の各所に設置された〝監視カメラ〟も24時間威力を発揮しています。このように、七里ガ浜の防犯はみんなの力です。

七里ガ浜は魅力ある住宅地として若年層にも人気ですが、50年の歴史の中で高齢化は否めません。青パト隊も拍子木隊ももちろん同様。ぜひ皆さんの参加をお待ちしております。

中村誠　七里ガ浜東5丁目
青パト隊隊長

自慢 其の14

七里ガ浜テニスクラブ

50年後の100周年を見据えて

昨年、創立50周年を迎えた七里ガ浜テニスクラブは、全国でも珍しい住民による自主運営クラブです。自治会組織ながら、他の歴史あるクラブや実業団の全国優勝クラブが所属する日本テニス協会下部組織の鎌倉市テニス協会へ、当クラブから副会長、監査役、その他役員を派遣するほどに認められています。

クラブ創設期、私はまだ中学生でしたが、新興住宅地で、見ず知らずの住民がテニスというスポーツを通じて、家族以上の繋がりを築いていく過程を両親の傍で経験いたしました。そして定年退職後、テニスを再開したいと思ったときに、近所で何時でも好きな時にプレー出来る『七里ガ浜テニスクラブ』が、昔と変わらず存在していることに感謝しました。最近は、親子や、祖父母と孫がテニスを楽しむ姿をお見かけするようになり、こうしてクラブの活気が続いていることをとても嬉しく思います。家族そして会員家族同士がコートや地域の中で楽しむテニスライフの場、それが七里ガ浜テニスクラブです。

50年後の創立100周年には、今の小中高生は50、60代とまだまだ現役です。次の世代に繋げる橋渡しをすることも、私たちの大きな課題です。そのためにも、①地域に密着し、家族や家族同士で楽しめる、②元気な高齢者がプレーできる、③初心者が気兼ねなく入会できる、④ジュニア会員を育成する、⑤安全にプレーできる 等の環境づくりを、一歩一歩進めていかなくてはと考えています。

吉田 晴彦　七里ガ浜東4丁目
七里ガ浜テニスクラブ常任委員長